

アポカリプト

2007(平成19)年4月17日鑑賞(試写会・三番街シネマ)

★★★★



監督・製作・共同脚本=メル・ギブソン/出演=ルディ・ヤングブラッド/ダリア・ヘルナンデス/モリス・バード/ジョナサン・ブリューワー/ラオウル・トルヒーヨ(東宝東和配給/2006年アメリカ映画/138分)

……メル・ギブソン監督が『パッション』(04年)に続いて放つ問題提起作は超異色で、マヤ文明の時代、ある狩猟部族の物語は全編マヤ語。また、主人公に求められた第1条件はアスリート能力だから、とにかく「走り」に注目……? 通常のハリウッド映画では滅多に観ることのできない(?)、メル・ギブソン特有の世界観がタップリと……。ちなみに、「アポカリプト」とは、ギリシャ語で「除幕、新たな時代」を意味する言葉。さて、そのココロをあなたはこの映画からどのように受け止める……?

ケイタイを持ったサルと幼児的新社会人……?

今日の完成披露試写会にはなぜか、新社会人のような若い男女がいっぱい。4月11日に観た『天井桟敷の人々』(45年)や4月14日に観た『二十四の瞳』(54年)は90%以上が年配者だったから、それに比べると雰囲気は全然違うもの……。

私は原則的に15分前には座席に座ってプレスシートを読んでいるが、最近の若いモンはギリギリになって入ってくる奴が多い。そのため、今日は両隣の席が空いており、ゆったりと座れるなと思ってっていると、ギリギリになって両隣ともそんな若者たちによって埋まってしまった。それはそれで仕方ないのだが、右側に座った3人のグループは、座ったと思ったらすぐに出ていき、場内が暗くなると同時に席に戻るや、買ってきたサンドイッチらしきものの袋をバリバリと破り、これを食べ始めたからビックリ……。さらに左側の若者は、やおらケイタイを取り出し、液晶画面を光らせながら何かをさかんにチェック……。

腹に据えかねた私は、サンドイッチを頬張っている右隣の若者に対して、「映画が始まったら食事はやめようよ。ちょっと行儀が悪すぎるよ」と言うと、恐縮したようにサンドイッチを飲み込んだようだったが、さらにその右隣で同様の行為をしていた女性は怪訝そうな顔でこちらをにらみつけていた……。さらに、すぐ前列で私の少し右側に座っていた3人の新社会人らしき男性たちは、上映直前まで大声でバカ話を続けていたうえ、映画が終了しエンドロールが流れ始めると、ただちに感想戦を大声で展開……。

こいつらバカじゃないの……。？　ここは、お前らのお楽しみ専用のカラオケボックスか……。？　こんなケイタイを持ったサルと幼児的新社会人が、これからの日本を背負っていくのかと思うと、もう絶望的……。？

『パッション』に続く衝撃作！

この『アポカリプト』を監督・製作・共同脚本したのは、イエス・キリストの受難を生々しく描いて全世界に衝撃を与えた『パッション』(04年) (『シネマルーム4』261頁参照) を私財を投げうって製作したメル・ギブソン。俳優としての成功に飽き足らず、映画製作や監督業に乗り出す「才人」はハリウッドに多いが、メル・ギブソンほど公私ともに(?)物議を醸す人物は珍しい……？

『パッション』に続く衝撃作は、何と全編マヤ語で語られる他、主人公のジャガー・パウを演ずるルディ・ヤングブラッドやジャガー・パウの妻セブンを演ずるダリア・ヘルナンデスをはじめ、そのほとんどが演技未経験で映画初出演。主人公のキャスティングにあたっては、「マヤ文明の物語を現代のリアルなストーリーのように感じさせてくれる役者」を求めたため、「俳優がどんな動きをし、どれだけ走れるかもオーディションの一部」だったとのこと。

主人公のジャガー・パウは中央アメリカのジャングルで狩猟を糧として平和に生きている部族の若者。そして部族長フリント・スカイ(モリス・バード)の息子として、次世代のリーダーとなるべき立場の男。さあ、そんな前代未聞の主人公ジャガー・パウは、どんな風貌、どんなスタイルでスクリーン上に登場し、どんなアスリート能力を見せてくれるのだろうか……。？

また「アポカリプト」とは、ギリシャ語で「除幕、新たな時代」を意味する言

葉。さて、このタイトルは一体何をアピールしようとしているのだろうか……？

時代背景の説明はあった方がベター、それとも……？

島国に住むニッポン人は、一般的に世界の歴史に疎く、とりわけメキシコ東南部で栄えたマヤ文明についての知識はほとんどゼロという人が多いのでは……？そこでこの映画に必要なのは、正確かつ詳細な時代背景と位置関係……と一瞬思ったが、他方で、さてそれはホントに必要なのだろうか、とも……？

この映画の冒頭は、部族長フリント・スカイを中心としたジャガー・パウたちの平和で楽しい生活が描かれる。しかし、それがいつの時代で、地球のどの部分なのかは、この映画の価値を判断するについてそれほど重要ではないのかも……？ 中盤、ジャガー・パウたちの村がゼロ・ウルフ（ラオウル・トルヒーヨ）たちによって襲われ、捕虜となったジャガー・パウたちは長い旅を続けていくことになる。しかし実は観客には、ジャガー・パウたちを襲ったゼロ・ウルフたちはマヤ帝国の傭兵であること、そして捕虜たちは売買のため（？）にマヤ帝国の都市に連れて行かれているのだということを、スクリーン上だけでは容易に理解できないはず……。しかし、これもあまり正確にわからない方が、かえってその緊張感をジャガー・パウたちと一緒に共有できるから、いいのかも……？

強さ vs. 弱さ、そして弱さ vs. 危険予知能力……

映画の冒頭、いきなり迫力満点の狩猟シーンが登場するから、まずはそれに注目！ そしてジャガー・パウがその肉をさばいている中で、仲間たちと共に親友のブランテッド（ジョナサン・ブリューワー）をからかうシーンが面白い。観客はいきなりそんなシーンに引き込まれていくうちに人間関係が一目瞭然に……。

腰だけを布で覆っている野蛮人のような狩猟部族ながら、彼らの婚姻制度は一夫多妻制ではなく、一夫一婦制のよう。しかし、子宝に恵まれれば恵まれるほどいいらしく、「俺なんか10人の子宝に恵まれた」と自慢する猛者もいるから、今なお子宝に恵まれないブランテッドは、母親からはもちろん部族全体から笑いモノにされている様子……？ 現代社会では、男女共に医学的に不妊の原因を解明し、不妊治療を施すことができるが、マヤ文明当時それはムリ……。したがって、

仲間や先輩たちから、面白半分かつ無責任なアドバイス(?)がなされるから、人のいいブランテッド夫婦は大変……?

こんな楽しいエピソードを紹介しながら、ジャガー・パウたち部族の平和でおおらかな生活が描かれるが、そこでジャガー・パウたちが出会った、漁で生きる部族たちの大移動は一体何のため……? また、その人たちが一様に怯えた表情をしていたのは一体なぜ……? そんな「恐れ」を敏感に感じ取ったジャガー・パウに対して、部族長であり父親のフリント・スカイは「息子よ、何ゴトも恐れるな」と諭したが、何が強さで、何が弱さかは難しいもの。ジャガー・パウのように、漁の部族たちの姿に恐怖を感じ取り、一種の危険予知能力をもつことは、決して弱さではないはず……。そんなジャガー・パウだったから、ある夜、部族を襲った悲劇については、誰よりも早く気づいたが……?

妻と息子の運命は……?

ジャガー・パウの親友ブランテッドは子宝に恵まれず苦勞していたが、ジャガー・パウはかわいい息子に恵まれ、妻セブンのお腹の中には2人目の子供も……。この映画最初の見どころは、そんなジャガー・パウたちの部族に対するマヤ帝国の傭兵ゼロ・ウルフたちの襲撃シーン。戦闘スペクタクルシーンはいろいろな映画で観てきたが、マヤ帝国の時代における〇〇部族 vs. △△部族のこんな迫力あるスペクタクルシーンは珍しいので、是非じっくりと……。

身重の妻を抱えているジャガー・パウは、その大切な妻と息子を大きな洞穴の中に隠そうとして縄づたいに妻子を降ろしていったが、その背後には襲撃軍の1人が迫ってきた……。結局、ジャガー・パウたちの抵抗むなしく、フリント・スカイは首を斬られ、捕虜となった男女は5人1組で繋がれたまま連行されることに……。すると、洞穴の中に落ちたことによって、殺されたり捕虜になることから免れたものの、食料もないまま洞穴の中で外界との接触を断たれてしまったセブンと息子の運命は……?

マヤ帝国、ピラミッド、神殿、生贄……

ジャガー・パウたち捕虜は一体何日歩いたのだろうか……? メル・ギブソン

監督はその旅の様子を丁寧描いていくから、その中で傭兵たちの人間関係と力関係そして各人各様の性格も、くつきりと浮かび上がってくる。密林の中を歩き、大きな川を渡り、山を越えていくとそこにはアッと驚くような大都会が……。

バブル崩壊後、都市再生の掛け声のもと、東京を中心に進んだ超高層ビル群の林立は、今、東京ミッドタウンのオープン、東京駅丸の内新ビルのオープン等華々しいが、この映画にみるマヤ帝国の首都(?)にあるピラミッドや神殿の華やかさにはとても及びもつかないもの……。これだけ大規模なセットを組むのは大変だし、あれだけ特殊な衣装とメイクを施した大量のエキストラの動員も大変だと思うが、さすが天下のプロデューサー、メル・ギブソンだけあって、そりゃ見事なものをつくりあげている。さらに、『パッション』でみせたイエス・キリストに対するこれでもか、これでもかという暴力シーンは、この『アポカリプト』でも健在で、ここまで捕虜として連れられてきたジャガー・パウたちに、ピラミッドの上にあるこの神殿で待ち受けていた過酷な運命とは……？

「皆既日食」は神の施した奇蹟……？

天変地異はすべて地球上に起こる自然現象だが、それが科学的に解明されない時代においては、すべて神の施す仕業と考えられたのは当然……。もっとも、マヤ文明は天体観測に優れ、非常に精密な暦を持っていたのが大きな特徴らしく、ネット情報によると火星や金星の軌道も計算していたというから、ひょっとして皆既日食も知っていたかも……？

それはともかく、干ばつが続き、疫病が広がっていたマヤ帝国において、今クルカンの神の怒りを鎮めるために行われていたのは、生贄の儀式。捕虜としてであっても、せつかく生まれ育った土地からここマヤ帝国の首都まで歩いてやってきた捕虜を待っていたのは、女たちは奴隷として売り飛ばされるだけだったが、男はその生贄の儀式に提供されるという過酷な運命だった。この生贄のシーンもしっかりメル・ギブソン流だから、お見逃しのないように……。そして、親友のブランテッドから「よい旅を……」と別れの言葉を受けて、ジャガー・パウが生贄の儀式に供されようとしたちょうどその時、発生したのが皆既日食。一瞬太陽の前に現れた月によって太陽の光は遮られ、帝国全土そしてピラミッド上の神殿

も暗黒の世界となったが、やがて太陽の光が復活……。皆既日食も神のせいなら、その解放も神のせいと、神官たちが考えたのは当然で、これによって生贄の儀式が中止されたから、ジャガー・パウは命拾い、のはずだったが……？

「生贄」の次は「人間狩り」……

生贄から逃れたジャガー・パウたちを次に待ち受けていたのは、競技場における、「自由」に名を借りた残忍な「人間狩り」……。縄を解かれた捕虜たちは、「お前は自由だ。あのジャングルまで逃げれば自由になれる」と言われたものの、走っていく後ろからは弓矢と槍が次々と飛んでくるから、自由になれる確率はゼロに近い……。しかもジャングルの手前には、とどめを刺す係員として武器を持ったゼロ・ウルフの息子スネーク・インク（ロドルフォ・パラシオウス）が配置されているから、さらに大変……。毎週一度フィットネスクラブで20kmを走っている私はある程度走りには自信があるが、走ることにかけての自信は狩猟部族のジャガー・パウの方がよほど上……。さて、ジャガー・パウはゼロ・ウルフたちによる残忍な「人間狩り」からうまく脱出できるのだろうか……？

走る、走る……登場人物たちのアスリート能力に注目！

競技場の中をジグザグに走ったり、身をかかわしたりといろいろ工夫を凝らしていたジャガー・パウだったが、遂にジャガー・パウの背中にはゼロ・ウルフが放った1本の矢がグサリと……。ところが、そこへとどめを刺しにきたスネーク・インクのナイフを奪って、ジャガー・パウはこれを返り討ちに……。そして、抜群のアスリート能力をもつジャガー・パウはケガに対する抵抗力も強いとみえて、矢傷を受け血を流しながらも、ジャガー・パウは走りに走った。

他方、最愛の息子を失ったゼロ・ウルフは数人の部下と共に徹底的にこれを追うことを指示。ここに、映画後半のハイライトであるジャングルの中での追撃戦の火蓋が切って落とされることに……。あれだけの矢傷を負いながら、こんな短距離選手のような走りがホントにできるのか、と思う面があるものの、それは横におき、ジャガー・パウのアスリート能力とそれを執拗に追跡するゼロ・ウルフたちの執念を、後半はタップリと鑑賞したいものだ。

ジャガー・パウが向かうのは……？

ジャガー・パウが逃れていくのは、あの懐かしい故郷。それはもちろん、洞穴の中に残した妻子を救うためだ。洞穴の中は、ジャングル特有の大雨でも降れば大変で、妻子は水没してしまう恐れも……。残された時間はごくわずか。そのうえ、自分も矢傷を負い、いったんは木の上に隠れることに成功したものの、ポタリポタリと落ちる血によって、追手にその所在のヒントを与えることに……。さあ、ジャガー・パウは走る、走る。そして、追手のゼロ・ウルフたちも走る、走る……。壮大なスペクタクルシーンの撮影とはまた別の、このスピード感溢れる追撃戦のカメラワークは大変な苦勞だったのでは……？

あれはスペインの船……？

バスコ・ダ・ガマやマゼランそしてコロンブスに代表される大航海時代が始まったのは15世紀中頃だが、その先陣を切ったのはまずポルトガルで、次いでスペイン。コロンブスのアメリカ大陸発見は1492年だが、マヤ帝国にスペインが侵入したのは16世紀のこと。

メル・ギブソン監督の『アポカリプト』で面白いのは、最後にそんなスペインの船団(?)をジャガー・パウが、そして彼を追い最後まで生き残った2人の兵士が発見するシーン。これを観れば、この映画の時代は西暦〇〇年とほぼ正確に特定できることになるが、この映画においてはあまりそういう歴史論争は無意味……？ なぜなら、この船団は古き良き時代の終わりと新しい時代の到来を示す象徴として登場させただけで、ジャガー・パウたち家族にとっての新しい始まりはそれとは別にあるはずだから……？

そんなこと、あんなことを考えながら、2時間18分にわたる大活劇が大満足の中終了することに……。くどいようだが、ここでエンドロールが流れ始めると、右前に座っていたアホバカ新社会人たちがたちまち大声で感想戦を始めたのが、実に残念……。

2007(平成19)年4月18日記